



NO.412

R3年11月1日

発行

〒869-1217

熊本県菊池郡

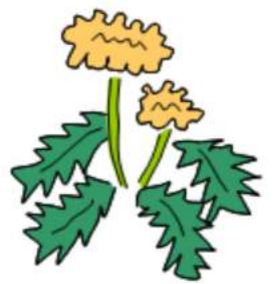
大津町森54-2

社会福祉法人

三気の会

三気の里

☎096-293-8100



「マスク装着の生活の中で…」

施設長 木下昭二

新型コロナウイルスの感染状況が、医療従事者の皆さんの献身的な取り組みや、国民一人ひとりの皆さんの行動制限への協力、そして何よりワクチンの開発と普及、及び接種率の高まりによって、第5波を乗り切ろうとしています。しかしながら冬季に入り、今後人流が増える行事が続く事での第6波到来の懸念や、インフルエンザの流行なども視野に入れておかなければならない為、私達福祉の現場で働くものとしては、まだまだ油断が出来ない状況である事に変わりはないと思っています。

三気の里でのコロナ禍になる前の生活では、毎年インフルエンザが流行し始める頃の11月～翌年の4月頃までの期間、スタッフは予防接種はもちろん、体調に変わりが無くても感染予防の観点から、勤務時はマスクを着用して支援に当たってもらっ

ていまして、それ以外の期間については、体調が悪い場合を除いてマスクの着用を義務付けるという事はありませんでした。おそらく多くの施設・事業所さんで同じような対応をされているのではないかと思います。しかし、一昨年の11月以降の新型コロナウイルス感染症の流行以来約2年に亘って年間を通してマスクを外す生活を送ることが出来ていません。(といっても24時間365日マスクを着け、徹底した生活を送れている訳でもありませんが…) 普段から日々折に触れて、何気なく自分の姿を見ているつもりではありませんでしたが、先日、ふと鏡に映った自分の顔を見て、何かしらの違和感を感じました。すぐに気付く事は出来なかったのですが、数日間意識して見ていると、頬の位置が以前に比べて下がっているような？気がしました。勿論年齢的な事が影響していることは否めませんが、この長期間

筋の一つ一つを日々の生活の中で(意識的・無意識的に)操り?司って?いく事で、その人の豊かな顔の表情が作られ、相手に対して「あの人は優しいそう」とか、逆に「怖そうな人」といったふうに印象付けられていくことが理解出来ました。

前号でお伝えしたように、今年の開園記念祭も新型コロナウイルス感染症予防の観点から、外部の皆様をお迎えしての開催は出来ません。今後のコロナウィルスとの共存した生活が、どのような形に落ち着いていくのかは未確定ですが、インフルエンザの流行が収まるであろう来春の頃にはマスクを外した生活が出来、顔っぱいの表情を使って「想い」が伝えられる時が来ればいいなあと願っています。(かなり気が早いですが…)

そして自分の顔を鏡で見て「頬の位置が戻った」と喜んでいるのか、「やっぱり年齢には勝てなかった…」と落胆しているのか!!どちらの結果になっても楽しみに受け入れたいと思っています。





11月



1班「人の優しさ」

今、自動車業界では、海外の生産工場が停止をしており、日本の工場も影響を受けているそうです。先月の上旬まではいつもの通り自動車関連の作業もありましたが、先月末からは受注を受けている工場からも作業の入荷数が少なくなり、以前に比べ受注量が減ってきました。しかし、工場のスタッフさんからは「利用者さんに迷惑をかけてはいけない」と仰って頂き、皆さんが出来るような作業を出して頂いています。それには本当に感謝をしており、人の優しさを感じました。そんな中で作業製品を頂くと、利用者さんも一生懸命頑張られます。特にAさんは離席をされることなく、集中して作業に取り組みれます。

少しずつコロナ感染者数も減ってきてはいますが、まだまだ油断はできません。早く元の日常生活を送れる日を願うばかりです。

支援員 園田真紀

2班「久しぶりの帰宅」

新型コロナウイルスによるパンデミックから2年が経とうとしています。ワクチン接種を終えても、未だ感染の恐怖と不安で緊張した日々を、利用者の皆さんと共に過ごしています。コロナ禍の為、年に数回だけの帰宅となり、利用者の皆さんの思いや、御家族の思いを考えると胸が痛みます。2班の皆さんは、毎月第2、第4土曜日が近づくと、「お父さん、お母さん」「りゅうほく(地名)」「帰宅バス」等、様々な言葉を文字や口にされます。その度に何と答えれば良いのか悩みます。曖昧な返事は期待を裏切る事になるので、事実を伝え、帰りたい思いに寄り添う言葉を考える毎日です。そして、先月3ヶ月ぶりに帰宅の日を迎えることが出来ました。

皆さんこの2年間の自粛生活の中で、マスクを着ける事、手指消毒をする事、ソーシャルディスタンスを保つ事、外食や外出ができない事、帰宅できない事、沢山の事を受け入れて下さいました。やまない雨はないように、いつかコロナの感染が収束するその時まで、ただ待つのではなく、自粛生活が充実した日々になるように、自分ができる事を考え、行動したいと思います。

支援員 中村 愛

3班「若いもんには負けられん」

10月に69歳の誕生日を迎えたFさん。いつも元気で何事にもやる気満々な姿には、頭が下がります。そんなFさんが昨年の暮れに体調を崩された時には、園全体の灯が消えたかのように静まり返っていました。それくらい私たちにとって、活力源となっているFさんが、笑顔で元気に誕生日を迎えられたことを嬉しく思います。Fさんはいつも、「若いもんには負けられん。私は105歳まで長生きするぞ!」と気合を入れて言われます。何故105歳かと言うと、Fさんのお母様が105歳まで長生きされたので、105歳が目標とのこと。長生きを目標にするということは、健康に気を付けなくてはと話をします。頭も使わないと、と言って折り紙を折ったり、計算ドリルで勉強したり、常に向上心を忘れない姿は見習わなくてははいけないと思います。

私が病気をした時は、とても心配していただきました。「お互い元気でおらんけんね」と声を掛けていただき、涙が出ました。いつまでも、「若いもんには負けられん」の気持ちでFさんと3班で頑張っていきたいと思います。

支援員 藤本 身知子

4班「待ちに待った運動会」

10月9日、天気は快晴。待ちに待った運動会当日。まずは準備体操でウォーミングアップ。玉入れでは落ちていた玉を1つ1つ拾いネットに入れるAさん。多少ラインからはみ出してはいましたが、玉を入れるのに一生懸命です。パン食い競走では目標に向かってまっしぐらのMさん。お目当てのホットケーキサンドを手に取り一安心。テントに戻り美味しく完食されていました。頑張った後のお昼のお弁当は格別です。いつもより品数多く皆さんそれぞれ目を奪われていましたが、ゆっくりデザートのマスカットまで食べられていました。

例年より暑い日差しの中で行われた運動会。そんな中でも皆さん楽しそうに身体を動かされていました。年内の行事も残り数える程となりましたが、皆さんと一緒に楽しく、盛り上げていきたいと思います。

支援員 荒川 百合子

5班「新しい仲間」

9月24日から5班に新しい仲間が増えました！最初、緊張気味で表情が硬かったKさん。人との関りが好きな方で少しずつ慣れてくるとスタッフと楽しく話をしています。Kさんは嵐やAKB48などアイドルが大好きでその話を楽しそうにしてくれ、私たちがわからない方の名前をたくさん知っており、本当にアイドルが好きなのだなと思いました。

家ではDVDを観ているようで、休憩時にスタッフと一緒に歌いながらダンスも踊ってくれます。また、作業ではぐるぐる倉庫の製品の梱包をしており、手先が器用な方なので見本を見ながら丁寧に仕上げられています。

これから三気の里の行事や日中の活動等でみんなで楽しく過ごし、思い出をたくさん作っていききたいと思います。

支援員 西本 綾子



「盛り上がった運動会」

今年度の運動会は、感染防止対策を講じた中で、利用者の皆さんと支援員のみでの参加で開催しました。競技内容は、30メートル徒競走、玉入れ、パン取り競走。30メートル徒競走では1位を目指して頑張っている利用者さんの姿、玉入れでは、狙いを定めてカゴに頑張っている利用者さんの姿はとても印象的でした。パン取り競争では5種類ほどのパンの中から1つ自分の好きなパンを取ります。目の前に沢山のパンがあり悩める方や、スタート時点から決めていた利用者さんもいらっしゃいました。皆さん思い思いに好きなパンを取り笑顔の競技となりました。毎年恒例のスタッフアトラクション。年齢別に2チームに分かれて綱引きとリレーを行いました。支援員の必死な姿に、利用者の方々も一生懸命応援され大盛り上がりのアトラクションとなりました。来年度は例年通りご家族の方も共にみんなで運動会を開催出来たらと思います。

支援員 山本 晴香



療育雑記

「力を注いだからこそ得るもの、
そして繋いでいける人と場所」

主任 石丸 直美

以前治療にあたり、医療に加え、
日頃から関わりを持つ支援者の力も
重要だとお話をさせてもらいました
が、その際に紹介していた3ヶ月に
わたり入院をしていた彼は、現在三
気の里で生活をされています。

退院に伴い、3ヶ月も口から食事
が摂れない状態での受け入れは、
不安しかありませんでした。受け入
れるにあたり、すぐに口から栄養が
摂れるとは思えませんので、本当に
受け入れをしてよいのか、受け入れ
が出来るのか。スタッフ間で話し合
いを重ね、考えに考えました。

難治性癲癇、重度の行動障害を持
つ方であった為、以前てんかん発作
から興奮が長時間治まらず、息も絶
え絶えな状態で救急車を呼んだとこ
ろ、その場は搬送してもらえまし
た。今後救急車内での動きの荒さが
危険である為、搬送は出来ないと言
われていました。いくつもの病院で
受け入れを断られたこともあります。

ですから、退院後上手く体調が整っ
ていかない場合、また体調の悪化時
に医療的処置の為受け入れてもらえ
る場所が早々にはないことが怖くて
たまりませんでした。不安というよ
り、怖いという思いでした。命と直
結するケースであったので、何度も
話し合いを重ねて受け入れをしまし
た。

受け入れから7ヶ月、彼は毎日提
供される食事を綺麗に平らげ、時に
スタッフの食事も欲しがる様子があ
ります。作業課題を以前のように仕
上げることはできていませんが、作
業製品を手にする、1時間、1時
間半と集中して課題に取り組みます。
浴槽に浸かることはできていません
が、シャワーを浴び、頭を洗い、身
体を洗い、髭を剃ると顔中にしわを
寄せて笑っています。排泄がタイミ
ング良くトイレで行えると、満足げ
に静かに微笑みます。

現在に至るまでには色々なことが
あり、解決法、改善策を考えてきま
しました。50kg強あった体重が35kgをき
り、骨を直接触っているような感覚
そして入院中に治療を受けるために
身体を保護されていた際に出来た多
数のすり傷等荒れた状態の皮膚でし
たから、骨折や傷になるのではない

かと触るのも怖い状況でした。

食事は退院当初から口にはしまし
たが、度々吐き出しが見られました。
飲み込んだ後も、体勢を整える為
に抱きかかえた拍子に、また発作等
で、上手く口に入れたものを飲み込
み、その後吐き出させない、薬を確
実に服薬してもらうことに苦慮して
きました。不快な状況は不安定にな
りますので、わずかでも汚れたオム
ツやパットの交換を行い、身体を支
えた状況での座位、立位が可能にな
ると、トイレでの排泄促しを1日の
うちに何度か行うようにしました。
介助ひとつひとつが、怖さと隣り合
わせて、体力と気力勝負でもありま
した。

その結果、シャワー浴の介助をし
たスタッフだけが、顔中シワだらけ
にして笑う彼を見ることが出来、タ
イミングよく排泄に立ち会えたスタッ
フは歓喜します。どんなに排泄があ
りそうな状況がそろっても、上手く
いかないこともあり、そのタイミン
グをしっかりと掴んでいるスタッフも
1人いるため、その差に尊敬と共に
嫉妬さえします。

彼の介助は主に3人のスタッフが
核となって始まり、現在は核となっ

たスタッフが相手を変えながらコン
ピを組んで行っています。その時々
のコンピは共に歓喜するのです。

三気の里では、同じように利用者
個々に対して、このような支援がチー
ムとして行われています。彼の核
(主軸)3人がどの利用者さんに対
しても主軸であるわけではなく、そ
れぞれの利用者に主軸となるスタッ
フがいて、チームが存在します。

「今日はしんどいな」「体のこわ
りが溜まっていつているな」と思っ
ても、もしあればありますが、それ
もシワだらけの笑顔を見たくて、上
手くいった感覚がうれしくて、毎日
が続いています。

彼も更に歳をとっていきます。い
つか必ず、違う場所に繋がなくては
いけないと思っています。



生活課

「快適な生活」

業務課長 本田 誠

生活課の目標は、利用者が快適な生活を送ることです。役割は多岐に渡りますが、衣類や寝具の調整、新調はその一つです。

保護者の方は、気候が変わる度に、自分のことより、我が子が着ている衣類や寝具を心配されます。今までは、保護者の方と連携し、気候の変化や本人の嗜好などに配慮した内容を提供してきました。

しかし、新型コロナウイルスの影響により、保護者の方が施設内に入ることに、一定の制限が設けられました。今回を期に、スタッフで調整や新調をして欲しいという依頼も多くあります。先にも書いたように、ただ調整、新調するだけでは、個々に適した内容とはならず、快適な生活には繋がりません。一つ間違えば、破衣行為や睡眠への悪影響にも繋がりがかねません。

嗜好や特性、タイミングに配慮しつつ、時には保護者に相談しながら、個々に適した内容を提供することで、利用者・保護者の心配が安心に変わるよう日々努めて参ります。

アンパ

「Nさんに教えてもらったこと」

支援員 黒澤 加代子

毎日、パンやクッキー作りを頑張らされている皆さんが楽しみにしている月一回の『アンパの日』、この日は午後からご家族の方やお世話になっている方への押し花のしおり作りをしました。

まず、裏に手紙や絵を描き、表に好きな花びらを一枚一枚選んで丁寧に乗せられると、世界に一枚だけの素敵なしおりが出来上がりました。

次に、ご家族の住所と名前を書いてもらおうと封筒を渡した時、それまで楽しそうに笑っていたNさんの表情が曇り「うちが住所はいらん！」と急に怒り出されたのです。落ち着かせるまで待ち話を聞くと「家に帰たい」とポツリと一言、悲しそうに答えられました。

皆さんに喜んでもらおうと企画したつもりだったのですが、実はご家族に喜んでもらうためであったこと、『コロナだからしょうがない』で済ませて、寂しい思いや帰りたい気持ちを感じてしまっていたことをNさんが教えてくれました。その後、10月23日に帰宅できると聞いて

たNさんは、出勤すると側に来て小さな声で「帰れるようになった」とにっこり。他の利用者の方を気遣うNさんの姿を神々しく感じました。



サービス向上委員会

「より良いサービスの提供を目指す」

主任 森田 康之

サービス向上委員会は三気の里を利用される全ての方に「より良い」サービスを提供していくことを目標に活動しています。利用者の皆様の生活が充実できるような企画の発案や運営、

日常生活での支援の向上を目指し見直しを行っています。昨年より、新型コロナウイルス感染症防止の観点から自宅への帰省、外出自粛のご協力をお願いしております。制限のある生活が窮屈にならないように、これまでになかったイベントを取り込んでいきます。

また、不安を抱えるご家族が少しでも解消できるように担当職員からの定期的な連絡を徹底しています。今後も関係部署と連携を図りながら「より良い」サービスの提供を目指していきます。



11月スケジュール

1日(月) わっふるステップアップ講座
 5日(金) BeTREE勉強会
 12日(金) 嘱託医来診
 13日(土) 開園記念祭
 17日(水) 誕生会
 18日(木) 共生社会フォーラム(於:パレア)
 インフルエンザ予防接種
 19日(金) 創作クラブ(干支作り)

23日(火) 音楽クラブ
 27日(土) わっふるペアレントメンター養成講座(～28日)、自治会活動
 28日(日) かくたつ研修
 毎週月曜日 訪問理容サービス
 毎週木曜日 ローソン移動販売
 BeTREE
 <営業時間>
 8:00～18:00

betree314



相談支援事業所

「想像を超えて」

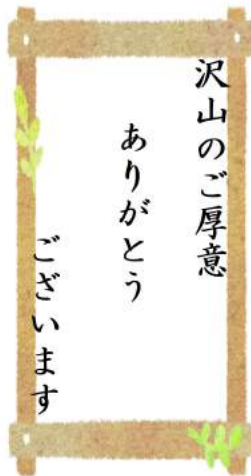
相談員 立花 訓子

コロナの影響により知人、友人との交流もめっきり減ってしまい、感動のない日々を過ごしていた毎日ですが、今年開催された東京パラリンピックでの数々のシーンで幾度となく自分の想像を超える場面を見ることが出来ました。

例えば、両腕が欠損し、両足にも障害のある中学生の女子スイマーが日本人第一号、しかも最年少でのメダリストとなり話題にもなりました。この選手に私自身が相談員として関わったとしたら、本気で水泳選手になるという夢を叶えようとしただろうかと思いました。他にも両腕が欠損している人が卓球をしたいと言った時に、どうしたら卓球ができるか真剣に考えたでしょうか。その人はラケットを口で啜ってパラリンピックの卓球のコートに立っていました。

「できるはずがない」という支援者の固定観念が障がいをもつ人にとっての壁にもなり得るのだとその時思い知らされました。

私も諦めない心を持って自分の想像を超えられるように、相談の仕事に向き合っていきたいと思えます。



【寄付】

三気の里家族会様

【物品】

吉田 和信様 田中 満子様
 櫻木 勇夫様 魚谷 秀文様
 清田 栄一様 松村 俊介様
 宮本 眞一様 渡邊 正司様



今村 修一様 亀崎 幸久様
 畑本 成美様 井上 律子様
 坂口 正浩様 森川 琇介様
 中嶋 久枝様 赤星 央子様
 坂梨 清美様 東坂 富士代様
 岩下 恭大様 井手 上昌子様
 田口 求様 田中 哲夫様
 金森 保様 錦野 郵便局様
 熊本県知的障害者施設協会様
 ※大津町杉水の方よりお米

【Vo】

前淵 隆子様(ブラッシング指導)

【後援会】

中田 康則様 田口 康博様
 樺嶋 尚志様